

夢魂^{むこん}独り飛ぶ

小説高杉晋作

古川 薫

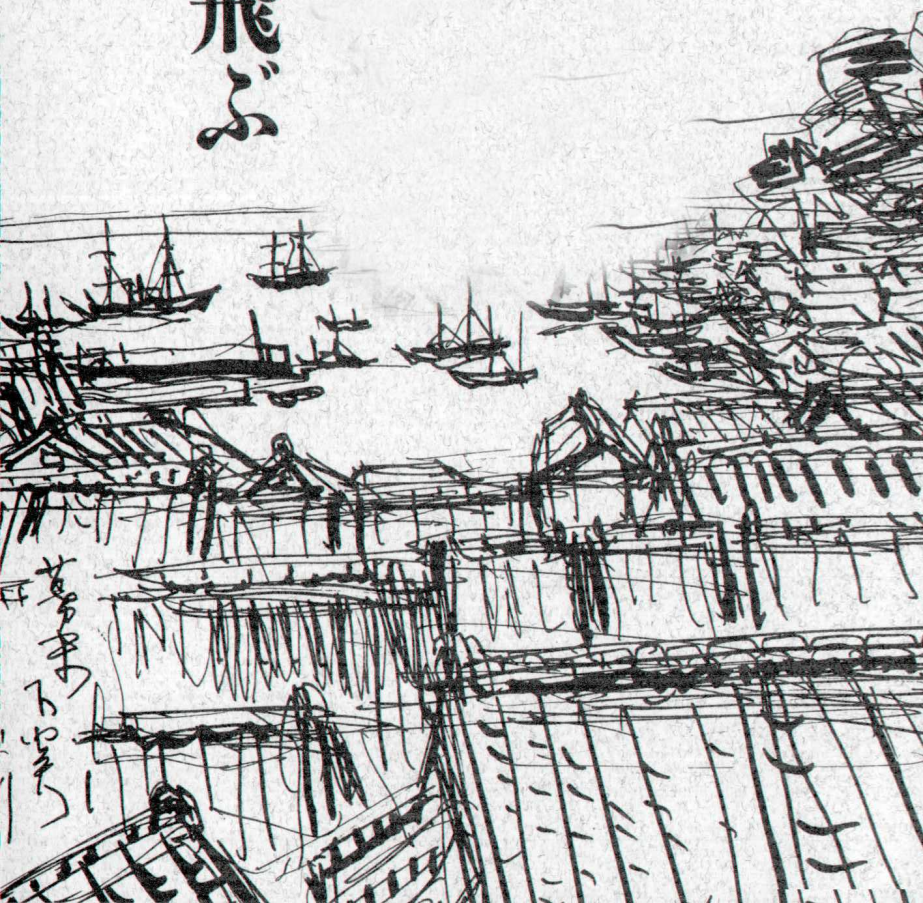


講談社

古川

魂独り飛ぶ

説高杉晋作



高杉晋作
下巻

夢魂^{むこん}独り飛ぶ

定価二二〇〇円

小説高杉晋作

著者 古川 薫

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二一二

〒一一一二

電話東京(〇三)九四五一一二二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

初版発行 昭和六十一年七月十五日



© KAORU FURUKAWA 1986, Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

栄光は遠きにより	5
夢魂独り飛ぶ	27
疾風来り去る	83
発すれば風雨	137
命なりけり晋作様	173

幀
裝

三
井
永
一

夢魂独り飛ぶ

小説高杉晋作

栄光は遠きにある

こないだ江戸、いや東京へ行ってきた。都会は埃っぽくて、人間にしても埃まみれの奴らがうようよしとる。腹も立った。目に一丁字もない連中が、侯爵だの伯爵だのと威張りくさりおって、不愉快きわまるご時勢だよ。古い馴染みかはるばる来たというのに、笑顔ひとつ見せないのだから。あれで国を治めるつもりだからあきれたものだ。

東京には二度と行かんぞ。そこでわしは、腰を据えて、この富永塾での講義に専心することにした。塾舎は借り物でお粗末だが、以前わしが吉田松陰と共に教鞭をとった松下村塾しやうかむせんよりはましな構えだ。あそこは物置小屋を改造したものだった。だが、皆も知っての通り高杉晋作のようなまああの人物が育ったではないか。お前たちもそのつもりでしっかり勉強しろよ。

きょうから講ずる『大学述義』は、わしが石川島の監獄に繋がれているとき、獄中で著わした本である。監獄帰りだからというて、そんなに脅えた顔をするな。別に切り取り強盗をやって捕まったのではない。

西郷が西南戦争をおっ始めただろう。わしは騒動に参加したわけではないが、薩摩の連中に「やれやれ、もっとやれ」と大いにけしかけてやったのだ。それで賊徒に荷担したということとで追われる身となった。四国あたりを逃げまわっていたのだが、このごろは新政府をおそれて、匿かくまってやろうという者がなかなかみつからん。まったく食うに困った。冬のことではあるし、枯草ばかり目についたよ。へたばって自首したのだ。そうしたらお前は前科もあるから

と、終身刑を食らわせやがった。

前科というのは、例のあれだ。明治三年の長州脱隊兵騒動。戊辰戦争から凱旋した兵士が、戦死者の遺族を救ってやれとかそのほかいろいろと御一新への不満をならして騒ぎを起こしたのだが、あのときもわしは一味と見られた。黒幕だというのだ。煽動したのではない。励ましてやったのだよ。追捕の手がのびてきたので土佐に逃げた。ひそんでいるうちに明治十年の西南戦争である。また追われたので二年後に自首したというわけだ。

ついでに明かすと、旧藩時代にもわしは投獄されたことがある。さらにその前には遠島だ。嘉永五年、三十二歳のとき、人の讒言ざんげんにあって島に流され、許されて帰るとこんどは親族の者から借牢願が出て萩城下の野山獄にほうり込まれた。

ことは明治二十二年だから、わしは六十九歳になるが、これまでの三分の一は犯罪者としての生活を送ってきた。重ねていうが、わしは盗っ人なんかじゃない。信念を枉まげなかったから牢に入れられたのだ。立派な国事犯だぞ。まあ立派というのも何だが、とにかく自分としては恥じるところはない。お前たちも安心して、わしの教えを受けるがよい。

ところで石川島監獄では、丸太の檻の中で終身刑だろう。暇つぶしでもせんからには、身がもたん。そこで年来の志だった『大学述義』の執筆にとりかかったのである。お前たち「大学」とはそもどのような学問か知っておるか。四書五経のひとつだくらいでは駄目だ。富永塾で学ぶからには、その大略をつかまなくてはならん。正心、修身、齐家、治国、平天下ちゅう言葉を、一度は耳にしたはずだ。それが「大学」の教えるところである。

石川島監獄に入って五年後の明治十七年、特赦によって出獄することになった。『大学述義』

をようやく書き終ったころだ。独房でせっせと著述に励んでいる姿が殊勝に見えたのだろうよ。わしは故郷の周防熊毛郡に帰ってきた。そしてこの私塾を開いたのが五年前である。

こんなことを喋っているうちに、少しばかり昔話がしたくなった。それというのも東京で会った奴等の顔を思い出すたびに、早く死んでしまつて榮譽にもありつけなかった連中のことが偲ばれてならんからである。中でもわしは高杉晋作という男が一番好きじゃった。晋作の話をしよう。その前に、吉田松陰について話さなければならんな。

松陰に会ったのは、萩の野山獄でだった。安政二年の冬のことだ。べるりの軍艦で密出国しようとして失敗し、投獄されてきたのだが、わしは初めあまり彼の人柄を好きではなかった。全体、真面目を絵に描いたような人物は、わしの好みではないのである。

松陰が獄中で『孟子』を講じはじめたときも、わしは陰からせせら笑っていたよ。わしは萩藩士の子に生まれ、藩校明倫館に学んで、大儒と名の高い山県大華に師事した。十三歳のとき藩主敬親公の前で『大学』を講じ、氣に入られて小姓役にもなったのだ。わしの学識からすれば、まだ松陰の学問は浅いものだった。それに彼は『孟子』に事寄せて自分の考えを、無理矢理人に押しつけるような講義ぶりだ。曲学阿世の徒ではないかと決めつけてやったのだよ。

しかし、それとなく聞いていると、話は案外に面白い。牽強附会であっても独自の見識をそなえていると思った。そうこうしているうちに、松陰がわしに書を習いたいという。野山獄というのは変わった牢でな。錠がほどこしてない。みんな借牢願で入っている者ばかりだ。自由に牢内を歩けた。だから松陰の講義も囚人たちは集まって一緒に聴けたのだよ。

松陰は、わしが趙子昂^{ちようきやう}を祖として尊円親王を宗とする高雅な書風の字を書くことを知って、にわかにそれを言い出した。断わりきれずに引き受けたが、松陰は獄囚のだれかれを誘ってわしの房にやってきたものだ。わしはだれともつきあわず、孤猿のような立場をとっていたのだが、いつの間にか連中のなかに溶けこんでしまった。松陰のやり方にコロリと参ったのだよ。あの男は、そういう技^{わざ}を心得ていた。

翌年、松陰は牢を出て行った。在獄一年くらいだったか。実家の杉家に帰って例の松下村塾をはじめたのだが、間もなくわしも出獄することになったのは、松陰が釈放運動をしてくれたからだ。松下村塾に集まる者が多くなり、松陰一人じゃ手がまわらなくなったので、賓師^{ひんし}としてきてもらいたいという。わしの出獄については、親族の者共が反対でな。また迷惑を撒きちらすであらうから、そのまま牢に繋いでおいてもらいたいと非人情なことをいいやがる。そこで松陰が身元引受人になるからと、あちこちに手を打ってくれてやっと釈放された。

その松下村塾に、高杉晋作が入塾したのは、あれは安政四年の暮れ近くだった。村塾の全盛期で、塾生は三百人くらいいた。そのうち真面目に通ってくるのは一、二割だったろうか。真面目ということになると、晋作はそれほど真剣な態度には見えなかったな。気がむいたからやってきたというような、何となく面白くなさそうな面^{つら}をして、飄然^{ひようぜん}とあらわれる。それも夜が多いのだよ。あとでわかったのだが、父親の小忠太や祖父の又兵衛が村塾に行くのを嫌うので、夜になってそつと家を脱け出してきていたという。わざとらしい不興面は、照れ隠しなのだ。

そうまでして晋作が村塾に通ってきたのは、やはり松陰に惹かれていたのだな。彼を誘った

のは中谷正亮だが、初めてあらわれたとき、松陰は尋ねた。これはだれにも入門の目的を問いただす松陰のやり方だ。ほとんどの者は用意してきたような大言壮語を披露する。だが晋作はこう言ったのだよ。

「私は何をしてよいかわからない。それを探すためです」

「なるほど。ではしっかり勉強なされませ」

と、松陰は丁重に答えた。やさしく友人と語る態度で話す。松陰は日ごろでもあまり大声を発するということがない。それでいて熱を帯びたような気脈が相手の心を包むように伝わる。晋作はたちまち松陰に惚れ込んでしまったのだな。

高杉家は二百石。父親は小納戸役などつとめ藩主の側近に侍る上土の家柄だ。足輕や中間の多い塾生の中では、晋作が最高の毛並みだった。そういう家の子は、この村塾に近づかなかったのだよ。彼はいろいろな障害をくぐり抜け、せっせと通ってくる。そのことが松陰にはまた可愛く思えて仕方がなかったのだろう。こんなに響きあうものを持った師弟の絆は、実に強いものである。

しかし、何しろ松陰は国事犯だ。賓師はこの富永有隣という城下でも名うての鼻つまみ者である。碌なことは習うまいと思つたのは、高杉家だけではなかったようだ。当時、藩校の明倫館では、校内で時事を論ずることを厳禁していた。学頭は山県大華で、わしの恩師ではあるが、いふなれば御用学者でな。藩はおろか幕府に対しても批評がましい言動を学生が見せるのを極度に嫌っていた。ところが松下村塾ときたら、まったくその逆である。昼間はまああの講義をするが、どうかすると松陰の時勢論がとび出してくる。夜は、塾生たちが口角泡をとば

して、日本の現状がどうの幕政がなつちよらんといったことで、ときには激論となり、つかみあいになりかねないような有様だ。松陰は黙ってそれを聴いており、時折静かな口調で自分の意見を述べる、といったぐあいだ。それが深夜までつづく。晋作はそこへやってくるのだよ。その仲間に割って入って、喋りまくるかというと、そうでもない。皮肉ったらしく口をひんまげて、ただ聴いているという態度である。

久坂玄瑞^{くさかけんずい}などは、なかなか論客であったな。晋作よりは早い時期に入塾し、学問のほうもずっと進んでいた。この二人がやがて村塾の双壁といわれるようになるのだが、初めは玄瑞の学力がよほど勝っていた。晋作は藩の剣術指南役・内藤作兵衛について柳生新陰流に身を入れ、その面では藩医の子の玄瑞など足許にも寄れなかった。松陰は晋作の素質を見抜いていたらしく、何とか勉強させようと思ったのだろう。玄瑞と晋作を噛みあわせて競争心をあおる方法をとった。

それかといって晋作は玄瑞に負けまいと必死になって本を読むような姿を人には見せないのだ。陰ではガリガリやっていたにちがいない。でなければあれほどの成果は得られなかっただろう。半年もしないうちに、玄瑞と肩を並べるくらいになったのだから。他人の前に出ると、おれは学問なぞそれほど本気でやってはおらんというような恰好を見せる。いずれにしても、晋作は天才だったよ。

村塾に入っところの晋作は十九歳だったが、生意気な小僧で、わしにむかって、

「弥兵衛さん」

と言う。わしはすでに有隣という号で通していたのだが、晋作だけはわしのことを本名で呼

ぶのである。

「いやしくも本塾の賓師だぞ。富永先生か、有隣先生と言え」

「そうですか」

と、ニヤニヤ笑っている。幼いころ天然痘をわずらったとかで、顔はひどいアバタ面だが、ちょっと吊りあがった目は澄んでいて、聡明な光を放っている。それでまた「弥兵衛さん」と呼びやがるのだから、実に憎たらしい奴であった。

わしは性狷介で知られたひねくれ者だ。嫌いな奴とみたら徹底的に嫌い、齒に衣させず悪罵を浴びせずにはおかぬというこの性格は、今もって同じである。ずいぶん人から恨まれたものだ。遠島になったのもそのためだし、許されて帰っても雑言癖はおさまらず、親族からも蛇蝎のように嫌われ、野山獄借牢の手続きをとられてしまった。

そこから救い出してくれたのが松陰だから、わしも松陰にだけは頭が上がらなかったよ。松下村塾では、なるべくおとなしくして、講義にも励んだのだ。しかし塾生の中にも、晋作をはじめ生意気な小僧が少なくない。そこで時には生地が顔をのぞける。たいていの奴は、わしを敬遠していたな。挑みかかってくるのは晋作だけだった。あいつが内心びくびくしているのは、わしにもわかっていた。多少剣術の心得があるといっても、わしだって侍だからいざとなれば鎗刀引き抜いてわたり合うくらいのことではできる。命なんぞいつ捨てても惜しくはないという自棄っぱちな気持もある。眉の薄いこの凶暴な面つきを、晋作も怖れていたにちがいない。奴はそうした自分の怯みに我慢できないらしいのだ。びくつきながら、わざとわしに突っかかってくる。

「弥兵衛さん」

と、執拗にそう呼んでわしを不機嫌にさせるのだが、影のない悪ガキというのは、どこなく憎めないものだ。恐れて遠のきながら、軽蔑の目をむけている陰気な小僧たちよりはましだとも思っていた。

ある日、わしは晋作のなかなか味のあるところを目撃して、ほめてやったこともあったのだ。たまたま晋作が昼間、村塾に姿を見せ、松陰をはじめ小輔や市イや十人くらい塾生が集まって雑談しているところへ、利助が泥まみれになってやってきた。雪解け道で転んだのだそうだが、ひどい恰好だった。実は転んだのではなく、突き転がされたというのだ。

利助とは伊藤だよ。伊藤博文だ。小輔は山県有朋、市イとこのころわしと呼んでいたのは山田市之丞、すなわち今の司法大臣の山田顕義あきよしだよ。みんなわしが村塾で教えてやった奴らだ。晋作をのぞいては、どれも出来の悪い連中だった。

ところでその利助だが、あれの親父は中間ちゅうかんでなあ、利助もその真似ごとをしていた。侍の家の下男みたいな仕事で駄賃をもらい、暇をみて村塾にやってくるというようなことだ。草履取りの尻からげだよ。その日、利助はどこかの侍の家の俵の供をして歩いていった。何か気に入らないことがあって、そのガキがぬかるみ道に利助をいきなり突き転がしたらしい。中間の身だから文句もいえない。利助は泣いていたよ。痛かったからではない。口惜しかったのだな。ひどい屈辱を感じただろう。わしだったら相手を斬り殺して、自決したにちがいないが、利助は泣きながら我慢した。そしてこんな世の中は、ひっくりかえしてやらにゃあいかと、その時考えたのではないか。たしかに利助は、あれから人が変わったな。学問にも身を入れるように

なつた。

「どこの子だ」

と、晋作がわめいた。

「それは聞かんで下さい」

と、利助が言う。

「おれが今から行つて、叩きのめしてやる。それとも果し状を書くか、助太刀してやるぞ」

「……………」

利助は、頑として口を割らない。ここが利助の利助たるところだ。晋作に相手の名を教えれば大騒ぎになる。自分の父親も困ると思つたのだろう。直情では動かない男である。

利助はしかし、晋作に心から感謝していたようだ。ほかの塾生は、痛々しげに見守るばかりだつた。彼のために本気で怒つてやつたのは、晋作だけだから、これはやはり忘れられんだろう。元治元年の末に、晋作が八十人足らずの者を率いて功山寺に決死の挙兵をしたとき、利助が彼に蹴いて行つたのは、あの折の恩義に報いるべく命をあずけたということである。

ついでに言つておこう。あの日、利助を突き転がしたのは、寄組の井原家の倅だつた。彼は養子に行き、今は阿曾沼姓となつて、郡の書記をつとめている。旧幕時代、寄組の井原家といへば二千石だぞ。それが明治になつたら郡の小役人だ。いっぽう利助は初代内閣総理大臣伊藤博文とかでついでないだまで羽振りをきかせていたではないか。位が転倒して、今では氣安くものも言えんだろう。

利助が井原の倅に突き転がされたのが発奮のきっかけだが、それが縁で晋作の腰巾着となつ